

3-6

「総合教育力」構築の大切さ

ベネッセ教育総研 小林 洋

はじめに

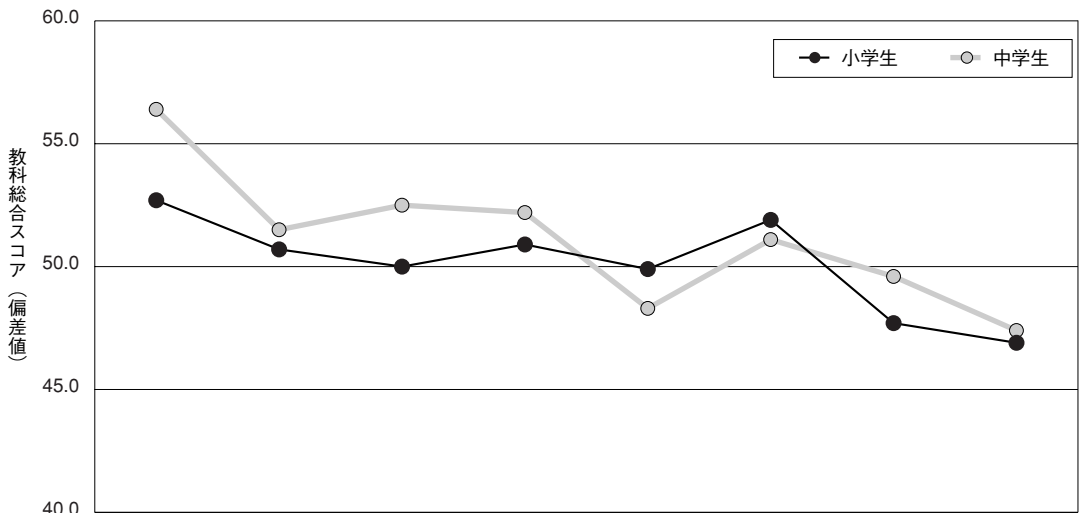
本章第3節で教師の取り組みと保護者の働きかけの連携の大切さをデータに基づいて実証している。本節では、教師の指導力と家庭の教育力に加えて、さらに「学校の経営力」を総合教育力のファクターとして考慮した場合、それらの3つの組み合わせのパ

ターンに応じてどのように子どもの学力に差異が現れるかを調べ、教師の指導力・家庭の教育力・学校の経営力の相互の連携を考える上で拠所となる材料を提供することを考えたい。

1 「総合教育力」の発揮により子どもの「総合学力」は一層高まる

1 教師の指導力、家庭の教育力、学校の経営力がともに高いパターンで教科学力が最も高い

図表 3-6-1 総合教育力のパターンと教科学力との関係



パターン	A	B	C	D	E	F	G	H
教師の指導力(FAN)	○	○	○	×	○	×	×	×
家庭の教育力(DIP)	○	○	×	○	×	○	×	×
学校の経営力(MORE)	○	×	○	○	×	×	○	×
小学校スコア	52.7	50.7	50.0	50.9	49.9	51.9	47.7	46.9
中学校スコア	56.4	51.5	52.5	52.2	48.3	51.1	49.6	47.4
小学校%	15.0	7.9	11.0	11.1	10.5	17.2	10.0	17.3
中学校%	22.3	5.5	19.1	5.8	6.5	14.5	8.1	18.3

図表 3-6-1 は、「教師の指導力 (FAN)」、
「家庭の教育力 (DIP)」ならびに「学校の経営力
(MORE)」の各総合スコアの平均以上 (○)・平均
未満 (×) によって、子どもを 8 つのパターンにグル
ーピングし、それぞれのグループに属する子どもの
教科学力の総合偏差値をグラフにしたものである。
パターン化するにあたっては、今回の調査対象校数
の制約により、子ども個別に保護者の DIP の ○×
判定を行い、前年度担任教師の FAN の ○×判定を
振り付けて 1 つの学校の中で子どもを (FAN×DIP)
の ○× の 4 つのグループ (○○、○×、×○、××)
に分け、これを同じ MORE 判定の学校の間で横断
的に集計する方法を採用している (したがって、同
じ学校の子どものグループが、同じ MORE 判定の
4 つのパターン (上の図表の A・C・D・G または
B・E・F・H) に分散しており、学校単位でのパ
ターン化とはなっていないので注意してほしい)。

この図表から、教師の指導力 (FAN)、家庭の教
育力 (DIP) ならびに学校の経営力 (MORE) が 3
つとも高いパターン A (○○○) で子どもの教科総
合スコアが最も高く、反対に 3 つとも低いパター
ン H (×××) で子どもの教科総合スコアが最も低
くなっていることがわかる。

以下で、FAN・DIP・MORE のパターンに
よる違いを詳しく見てみよう。

1) 学校の経営力の差による学力差は、教師の指導力、家 庭の教育力がともに高いパターンで最も大きく現れる

(FAN×DIP) が同じパターンを示す A と B (○
○)、C と E (○×)、D と F (×○)、G と H (××)
の 4 つのグループでは、D と F (×○) の小学校の場
合を除き、すべて学校の経営力 (MORE) の高いほ
うが、子どもの教科学力が高いという傾向が現れて
いる。このことは、学力向上における学校の経営力
の果たす役割の大切さを改めて示唆するものと言え
よう。例えば、C と E (○×) のパターンの間では、
小学校では子どもの教科学力は C ; 50、E ; 50 と
同レベルであるものの、中学校では C (53) > E (48)
となっており、学校の経営力の平均以上と平均未満
によって偏差値で 4 ポイント強の差が生じている。
この格差は、図表からわかるように、小・中学校と

もに A と B (○○) のパターンの間で最も大きい。こ
のことは、教師の指導力と家庭の教育力が平均以上
の場合において、学校の経営力の差が子どもの学力
により大きく影響するということが物語っている。

本章第 4 節で、学校の経営力は、主として教師
(FAN) や家庭 (DIP) の働きかけを通して子ども
の学力に影響を及ぼすという見解を述べたが、同じ
(FAN×DIP) のパターンであっても図表 3-
6-1 に見るように学校の経営力 (MORE) の差に
よる子どもの学力差が生じる原因としては、経営力
の高い学校では、教育目標の明確化とその教師間や
保護者との共有化や学力向上の PDCA の推進体制
の整備など学校としての組織的な取り組みが行なわ
れている度合いが高く、教師個別の指導力を表す F
AN のレベルは同じであっても、学校全体としての
組織的な教育力に差が生じていることが主に考えら
れる。また、子どもとの校長の日常的な接触を通し
て、子どもに直接与えている影響の違い (= 校長の
直接的な教育力の差の影響) も小さくないのかもしれ
ない。

2) 家庭の教育力の差による学力差は、教師の指導力、学 校の経営力がともに低いパターンで最も大きく現れる

次に、(FAN×MORE) が同じパターンを示す A
と C (○○)、B と E (○×)、D と G (×○)、F と H
(××) の 4 つのグループの間では、いずれも例外な
く、教科学力は (DIP : ○) > (DIP : ×) という
関係を示している。この格差は、小・中学校ともに
教師の指導力 (FAN) も学校の経営力 (MORE) も
平均未満という F と H のパターンの中で最大となり、
このようなパターンに属する子どもにおいては、家
庭の教育力の差が如実に現れることがうかがわれる。

3) 教師の指導力の差による学力差が最大となるパ ターンは、小・中学校間で異なる

また、(DIP×MORE) が同じパターンを示す A
と D (○○)、B と F (○×)、C と G (×○)、E と H
(××) の 4 つのグループの間では、B と F の小学校の
場合を除き、教科学力は (FAN : ○) > (FAN : ×)
の関係を示しており、この格差は、小学校では、DIP
と MORE がいずれも平均未満の E と H、中学校で
は、反対に DIP と MORE がいずれも平均以上の
A と D のパターンの中で最大となっている。

以上のように、図表3-6-1から、教師の指導力(FAN)、家庭の教育力(DIP)、学校の経営力(MORE)の大切さをそれぞれ再度確認できると

もに、それらが総合的な教育力として発揮されてこそ、最大の効果がもたらされることがわかるのである。

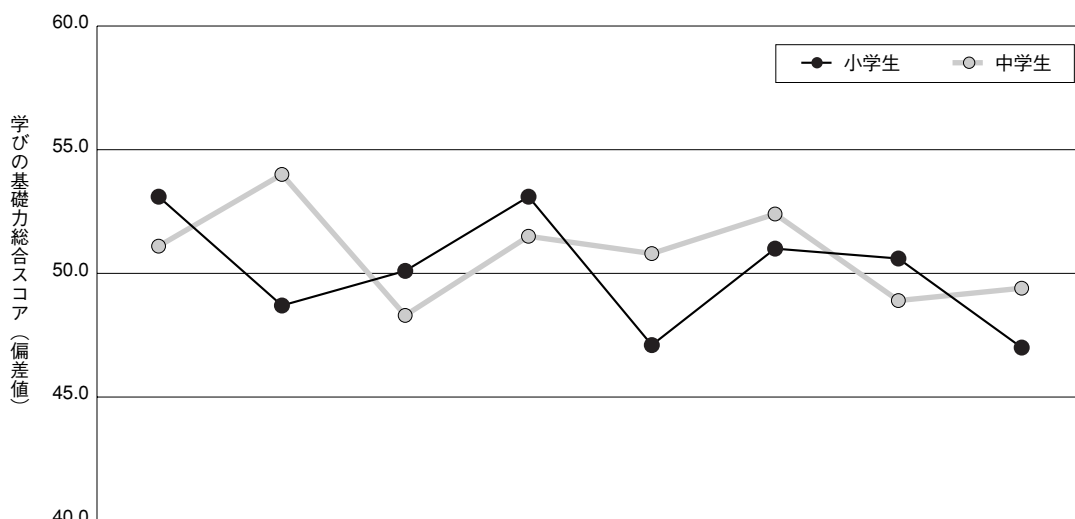
2 「学びの基礎力」の育成には、家庭の教育力の効果が大きい

次に、同様に、総合教育力のパターンと「学びの基礎力」との関係を見てみよう。

学びの基礎力の総合スコア(偏差値)との関係を表したものである。

図表3-6-2は、総合教育力のパターンと学

図表3-6-2 総合教育力のパターンと学びの基礎力との関係



パターン	A	B	C	D	E	F	G	H
教師の指導力(FAN)	○	○	○	×	○	×	×	×
家庭の教育力(DIP)	○	○	×	○	×	○	×	×
学校の経営力(MORE)	○	×	○	○	×	×	○	×
小学校スコア	53.1	48.7	50.1	53.1	47.1	51.0	50.6	47.0
中学校スコア	51.1	54.0	48.3	51.5	50.8	52.4	48.9	49.4
小学校%	15.0	7.9	11.0	11.1	10.5	17.2	10.0	17.3
中学校%	22.3	5.5	19.1	5.8	6.5	14.5	8.1	18.3

学びの基礎力の場合、教科学力の場合とはやや異なり、必ずしも、教師の指導力(FAN)、家庭の教育力(DIP)、学校の経営力(MORE)が共に高いパターンAで学びの基礎力が最も高いという関係にはなっていないが、小・中学校ともに学びの基礎力の偏差値は50以上となっており、反対に、FAN、DIP、MOREが3つともに低いパターンHは、学びの基礎力の偏差値は小・中学校ともに50未満となっている。

偏差値50以上のスコアを小・中学校共通して示すパターンは、A(○○○)・D(×○○)・F(×○×)

の3つであり、いずれも家庭の教育力(DIP)が平均以上のパターンである。反対に、小・中学校共通して偏差値50未満となっているのは、パターンH(×××)のみである。

小・中学校間で顕著な違いを示すのは、B(○○×)とE(○××)の2つのパターンで、前者では中学校54 > 小学校49(差5ポイント)、後者では中学校51 > 小学校47(差4ポイント)となっている。

教科学力の場合と同様に、パターンによる違いをもう少し見てみよう。

(FAN×DIP)が同じパターンを示すAとB(○

○)、CとE(○×)、DとF(×○)、GとH(××)の4つのグループでは、小学校では、いずれも学びの基礎力は(MORE:○)>(MORE:×)であり、「学校の経営力」の寄与がうかがわれるが、中学校では、すべて関係が逆転している。また、(DIP×MORE)が同じパターンを示すAとD(○○)、BとF(○×)、CとG(×○)、EとH(××)の4つのグループの間で見ると、教師の指導力の高低による学びの基礎力の差は、BとF(○×)で小学校において2ポイント強の差が生じていることを除けば、全般に差はほとんどないか、やや逆転の傾向を示している。

しかし、(FAN×MORE)が同じパターンを示すAとC(○○)、BとE(○×)、DとG(×○)、FとH(××)の4つのグループの間で、DIPの高低による違いを見ると、小・中学校ともに例外なく、学びの基礎力は(DIP:○)>(DIP:×)の関係を示しており、学びの基礎力の育成に対する家庭の教育力の影響の大きさが改めて読み取れるのである(「生きる力」についてもほぼ学びの基礎力と同様な傾向である)。

教科学力の場合と学びの基礎力の場合とでの上で見たような総合教育力のパターンによるスコアの変動の違いが示していることについて結論を導くためには、より詳細で慎重な分析が必要と思われる。しかし、上のデータは、学びの基礎力(や生きる力)の育成については、現状では家庭の教育力に依存する割合が高く、学校の影響力が相対的に小さいことを示していることは間違いない。これを学校と家庭との教育の役割分担の在り方として肯定的に捉える見方も考えられるが、従来の教科学力だけではなくより総合的な学力の育成を目指すことが望まれる今後の学力向上の取り組みにおいて、学校の経営課題として、また教師の取り組み課題として「学びの基礎力」や「生きる力」の育成をも今以上に積極的に位置づけていくことが求められることを示すデータではないだろうか。

以上のデータと分析に対して、学力向上に学校経営の立場で取り組んでおられる大阪教育大学附属平野小学校副校長の外山善正先生から再びコメントをいただく。

「総合教育力」を高めていくために必要なシステムづくり

大阪教育大学附属平野小学校 副校長 外山 善正

保護者や地域の人々から信頼される学校づくりを進めていくためには、「教師の指導力」「家庭の教育力」「学校の経営力」の相互の連携を図った「総合教育力」の構築をめざしていく必要がある。しかし、学校としてそのような「総合教育力」を構築していくためには、具体的にどのような施策を行うことが必要なのだろうか。わたしは、個々の学校現場においては、「総合教育力」を高めるファクターとしての「教師の指導力」「家庭の教育力」「学校の経営力」は、それぞれが別々の取り組みで向上するというよりも、それぞれの学校の特色を活かした教育実践を推進していく中で有機的に関連しなから向上していくものではないかと考えている。ここでは、大阪教育大学附属平野小学校の事例を交えながら、「総合教育力」を高めていくために必要なシステムづくりについて考えていきたい。

◆ 1. 学校の経営力の差による学力差は、教師の指導力、家庭の教育力がともに高いパターンで最も大きく現れる

図表3-6-1で、まず興味深かったのは、「教師の指導力と家庭の教育力が平均以上の場合において、学校の経営力の差が子どもの学力により大きく影響する」という指摘である。その理由として、「経営力の高い学校では、教育目標の明確化とその教師間や保護者との共有化や学力向上のPDCAの推進体制の整備など学校としての組織的な取り組みが行なわれている度合いが高く、…学校全体としての組織的な教育力に差が生じているからではないか」という分析がなされている。このことを本校に置き換えて考えてみると、やはり本校にも「教育目標の明確化とその教師間(や保護者と)の共有化」を強く迫られる時期があった。

「総合的な学習の時間」完全実施の約8年前、「総合的な学習の時間」のカリキュラム研究に取り組み始めた頃のことである。その頃は導入がうわさされる「総合的な学習の時間」の全体像も明確ではなく、手探りで実践研究を進めていた。教師間でも「総合的な学習の時間」に対する理念が違い、そのため扱う内容も違っていた。校内で何度も研究授業を行い、討議会で議論を重ねた。「総合的な学習の時間」のカリキュラムづくりには、どうしても共有する理念やそれを具現化する構造が必要であった。本校の場合、「学校から離れた地域から通学する子が多く、人とのかかわりが希薄になりやすい子どもたちにも人や社会、自然とのかかわりを保障すること」、「学ぶ態度や学ぶ力、自己の生き方を考えること」を共有する理念としてカリキュラムづくりを進めることにした。このように学校の内側に共有する理念を強くつくりだせないと、例えば「英語の時間を増やして欲しい」「パソコンも大切だ」「総合的な学習の時間よりも基礎・基本の定着を」といった保護者の多様なニーズに対して、学校は主体性を発揮して説明をすることができないのである。そういった意味では、学校の説明責任とは学校の教育方針の主張であるといえる。

本校は、教師の指導力と家庭の教育力が平均以上に高い学校であると思われる。しかし、学校の内側に教育目標の明確化と教師間や保護者との共有化を進めることが出来なければ、それらのよさを十分に発揮できないということをお今回のデータは物語っている。

◆ 2. 家庭の教育力の差による学力差は、教師の指導力、学校の経営力がともに低いパターンで最も大きく現れる

次に、「家庭の教育力の差による学力差は、教師の指導力、学校の経営力がともに低いパターンで最も大きく現れる」という指摘については、やはりそうかと納得できる。

しかし、今回の調査では、学校数の制約から1つの学校の子どもを学校間で横断的に集計する方法を採用しており、学校単位でのパターン化とはなっていないことが少し残念であった。「学校の経営力」からいうと、学校単位にパターン化した場合の集計結果に非常に興味をいだく。というのも、学校はそれぞれ子どもや保護者、地域の特性が違っているが、その中で効果を上げている学校（「効果ある学校」）は、教科学力や生きる力の偏差値が比較的高いだけでなく、学校内の学力格差も少ないはずである。すなわち、学力の底上げに成功している学校とはどのような施策を行っているのか、何が有効に働いているのかが明らかになると考えるからである。

今回の調査では、家庭の教育力の差による学力差は、ある程度教師の指導力や学校の経営力で補える可能性を示唆した。今後、教師の指導力や学校の経営力のどのような取り組みが有効に働いているのかが明らかになることを期待したい。

◆ 3. 「学びの基礎力」の育成には、家庭の教育力の効果が大きい

最後に、「学びの基礎力の育成には、家庭の教育力の効果が大きい」という指摘について述べさせていただく。「家庭の教育の効果が大きい」理由として、「学びの基礎力（や生きる力）の育成については、現状では家庭の教育力に依存する割合が高く、学校の影響力が相対的に小さいことを示している」としたうえで、「今後の学力向上の取り組みにおいて、学校の経営課題として、また教師の取り組み課題として学びの基礎力や生きる力の育成をも今以上に積極的に位置づけていくことが求められる」と結んでいることは、大変重要である。

わたしたちが気をつけなければならないのは、「全てが家庭教育の責任」として学校や教師の取り組み課題としないことである。確かに一部に「子どもの養育放棄」などの大きな問題を抱えている保護者も存在するが、大多数は誠実に子育てに向かい合っている。問題なのは、正しい子育ての情報を手に入れる機会が乏しいことである。都市化、核家族化の進展の中で、若い母親は育児書を手にも、早期教育の案内書と公園での先輩格の母親の言葉に一喜一憂しながら子どもを育てている。プレスクール、プレ幼稚園などの場を通じて望めばいつでも幼児教育や家庭教育の正しい在り方に触れることができ、社会として子育てを支援していく取り組みが必要とされているのではないだろうか。

本校の場合は、学校創立100周年を期に、「子どもの学習活動を直接支える」参画型のPTA活動に取り組んでいる。清掃活動やクラブ活動と一緒に参加していただくことを通して、まずは学校での子どもの様子に関心をもっていただくようにする。そして、「総合的な学習の時間」や生活科などの授業に参画していただいて、学習の内容や方法に触れ、支援の仕方を考えていただくようにしている。算数や国語の授業などでは、家庭での指導の仕方も学べる。このような「家庭の教育力」を向上させる「学校の経営力」が今後重要になってくるだろう。

以上見てきたように、「教科学力」「学びの基礎力」「生きる力」といった「総合学力」の育成は、「教師の指導力」「家庭の教育力」「学校の経営力」といった「総合教育力」に支えられていると言えるだろう。その中でも、今後特に「学校の経営力」が「学びの基礎力」「生きる力」といった学力をいかに積極的に育成していくか、そのシステムづくりが課題となるだろう。